劇場塾2019

体験して、
考えて、
つながって、
明日からのヒント!を
一緒に見つけませんか？

P2-5 地域の担い手育成クラス～ダンス編

「ダンスを届ける!」
地域に向けたダンスプログラムを作ってみたい方へのクラス。
- 日　程：12／5（木）～6（金）
- 対　象：ダンス作品の創作に携わっている方、地域でのダンスワークショップやアウトリーチ実践に関心のある方、ダンスのコーディネートに興味のある方。公共ホール・文化施設の職員、学校・福祉施設関係者、学生など
- 会　場：北九州芸術劇場　創造工房　稽古場
- 定　員：10名程度
- 参加費：2,000円（学生1,500円）
- 講　師：セレノグラフィカ（隅地茉歩／振付家・ダンサー、阿比留修一／ダンサー）、マニシア（ダンスアーティスト）、神前沙織（NPO法人JCDNチーフ・コーディネーター）

P6-8 劇場基礎クラス

「これからの公共劇場を考える　まち×ひと×舞台芸術＝??」
劇場について知りたい・考えたい方向けのクラス。
- 日　程：12／18（水）
- 対　象：公共ホール職員、制作者、地方公共団体文化行政担当者、一般、学生など
- 会　場：北九州芸術劇場　創造工房　稽古場
- 定　員：20名程度
- 参加費：1,500円（学生1,000円）
- ゲスト：有門正太郎（有門正太郎プレゼンツ）、岩崎正裕（劇団太陽族）、藤岡保（北九州市身体障害者福祉協会アートセンター・センター長）
- 進　行：北九州芸術劇場職員

P9 オープンレクチャー

舞台の仕事シリーズvol.1「翻訳家の仕事」
舞台芸術を広く楽しみたい方を対象にしたレクチャー。
- 日　程：11／30（土）
- 対　象：舞台芸術に興味のある方ならどなたでも
- 会　場：北九州芸術劇場　創造工房　稽古場
- 定　員：30名程度
- 参加費：500円（応募多数の場合は抽選）
- 講　師：岩切正一郎（国際基督教大学(ICU)教授・戯曲翻訳家）

P10-11 舞台技術セミナー

札幌文化芸術劇場 hitaru×兵庫県立芸術文化センター×北九州芸術劇場　3館共同企画
「ITネットワークで劇場をつないでみた!何ができる?!」
舞台技術やライヴビューイング等に興味のある方向けのクラス。
- 日　程：12／12（木）
- 対　象：舞台技術者、文化施設関係者、および一般
- 会　場：北九州芸術劇場　大ホール
- 定　員：500名
- 参加費：無料
- 講　師：尾本章（九州大学 芸術工学研究院 教授）、長津結一郎（九州大学 芸術工学研究院 助教授）

P12 これまでの「劇場塾」の流れ（2012～2018年度）

北九州芸術劇場の
劇場塾とは？

目　的

開館以来、人材の育成を柱の一つに掲げてきた北九州芸術劇場が、2012年度から継続開催している人材育成プログラム。劇場塾は、これからの地域文化の振興を担う人材の育成や、人的ネットワークの形成を目的にしています。

内　容

西日本・九州エリアの公共劇場・ホールで地域の文化芸術の振興に関わるさまざまな立場の人や、地域で活動する表現者、地域に向けて芸術文化の振興を担う人などを対象とし、舞台芸術分野の専門家を招いたレクチャーやワークショップなどを開催しています。

日　程

2019年度
- 11月30日（土）…… オープンレクチャー／舞台の仕事シリーズvol.1
- 12月　5日（木）～6日（金）…… 地域の担い手育成クラス
- 12月12日（木）…… 舞台技術セミナー
- 12月18日（水）…… 劇場基礎クラス

劇場塾 2019

令和元年度 報告書

Kitakyushu performing arts center REPORT 2019

劇場塾 2019
Kitakyushu performing arts center REPORT 2019

主催：公益財団法人北九州市芸術文化振興財団　共催：北九州市
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）｜独立行政法人日本芸術文化振興会

｜発　行｜
北九州芸術劇場
舞台事業課

〒803-0812 北九州市小倉北区室町1丁目1-1-11
TEL／093-562-2620　FAX／093-562-2633
http://q-geki.jp

北九州芸術劇場
KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER

地域に向けたダンスプログラムを作ってみたい方へのクラス

地域の担い手育成クラス～ダンス編
「ダンスを届ける！」

▮日　程：12／5（木）～6（金）
▮会　場：北九州芸術劇場　創造工房　稽古場
▮参加者：12名

今年度の「地域の担い手育成クラス」はダンス編。学校や福祉施設などで、初めてダンスに触れる方を対象とするダンスプログラムを作ってみたい方に向けた入門編として実施した。テーマは、「ダンスを届ける」。地域にダンスの輪を広げていくためには、どのような手法があるのか？プログラム作成や企画には何が必要なのか？具体的なワークショップ（以下WS）を体験し、事例に学び、参加者自らがそれぞれの立場や視点で考えを深めていきながら、明日からのヒントにつながる「何か」を見つけてもらうことを目指した。

集まった12名の参加者は、ダンサーやダンスを教えている方、公共ホール職員など。まずは開始前に、ファーストメモを書いてもらった。お題は、「ダンスを届ける」と聞いて何を思い浮かべるか？インスピレーションでキーワードを抽出してもらうことで、全体に流れるテーマへの最初の一歩とした。オリエンテーションの後は、講師によるデモンストレーションWSへ。プログラムは「初めて出会う人と交流することを目的とした内容」とし、初日はセレノグラフィカさん、2日目はマニシアさんのWSを体験していただいた。体験後は、感じたことや印象などをすぐに付箋にメモしてもらう。その後にWSのねらいや構成手法をアーティストに解説してもらうことで、より理解が深まるよう工夫した。また、解説を聞いてさらに感じたことや質問などが立ちのぼれば、随時、付箋にアウトプットしてもらった。

profile

セレノグラフィカ
（隅地茉歩／振付家・ダンサー、阿比留修一／ダンサー）

関西を拠点に、国内外を問わず幅広く活動を展開するダンスカンパニー。不思議で愉快な作風と、緻密な身体操作が持ち味。450を超える教育機関へのアウトリーチ、全国各地での市民参加作品の創作など、ダンスの普及に情熱を注いでいる。

マニシア（ダンスアーティスト）

長期に渡るNY活動後、福岡で多世代多国籍の参加者たちと舞台活動を継続し、障がいのある人を含めたワレワレワークスを結成。国内外でWSや公演を通して医療、福祉、教育におけるダンスを展開している。

神前沙織
（NPO法人JCDNチーフ・コーディネーター、プランナー）

05年よりJCDN（ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）にて「踊りに行くぜ!!」等の制作を担当。09年以降、子どもから大人まであらゆる人を対象とした「コミュニティダンス」の普及に携わり、ダンスと社会をつなぐ様々なプログラムを企画・コーディネートする。

schedule

12/5（木）18:00～20:30

- ファーストメモ［Q:「ダンスを届ける」と聞いて何を思い浮かべるか？］
- input　18:00～18:10　オリエンテーション＆講師紹介
- input　18:10～19:10　ダンスWS①［ダンスとであう/セレノグラフィカ］
- メモの時間①WSを体験して感じたことや印象をメモ
- input　19:20～19:50　WSの解説①Q＆A
- output　19:55～20:30　参加者の自己紹介

セレノグラフィカ編

60分のダンスWS解説①［ダンスとであう/セレノグラフィカ］

時　間	内　容	ねらいやポイント
5分	名前でバンザイ	今日の仲間を知る。 意外性のあるお題で発想に刺激を。
15分	歩く一式	踊ることの土台づくり。 照れや抵抗感をはずす。ダンスの経験値に左右されないことからスタート。
10分	ペアワーク① 後ろ姿を追いかけて	対面していない気軽さ、気楽さ。 空間を移動しやすい。
10分	ペアワーク② 親はどちら？	相手の身体を感じるセンサーを開く。 ことばに頼らない身体の対話（交信）。
15分	ネオフォークダンス （人間いす取りゲームダンス）	ゲーム性。遊んでいる感覚を共有。 仲間との一体感や達成感。
5分	リラックスー曲	ねぎらい、身体へのいたわり。

（1）大切にしているポイント
◎身体を童心にかえしてあげること。
◎ダンスは、目的ではなく結果。踊るためにあれこれやってみるのではなく、「いつの間にか」「知らない間に」「気がついたら」踊っていた、という結果に結びつけていくことが大事。

（2）絶対にしてはいけないと肝に銘じていること
◎参加者にケガをさせないこと。
◎否定的な判断と受け取られるような言葉は使わないこと。
◎切り上げるタイミングを見計らうこと。参加者の身体の疲労度を見誤らないこと。

（3）（あえて）過去の失敗談をひとつ
◎会場の時計に誤差があり、WSを途中で打ち切らなければいけなかったことがある。時間の確認は重要。

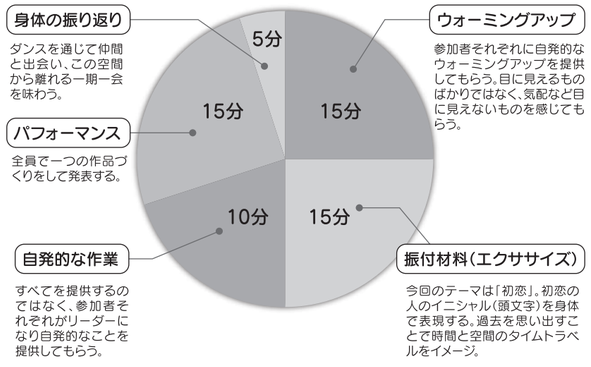
schedule

12/6（金）10:30～17:00

- input　10:30～11:30　ダンスWS②［ダンスとであう/マニシア］
- メモの時間②　WSを体験して感じたことや印象をメモ
- input　11:40～12:10　WSの解説②Q＆A
- output　12:10～12:45　探求の時間③二者のWSから見えてくる事とは？
- input　13:45～15:05　レクチャー　［アーティストやコーディネーターからの報告］
- セカンドメモ　［Q:ダンスを届けるとは？→どうしたら届けられるか？］
- output　15:15～17:00　探求・発表・ディスカッション　［ダンスを届けるということについて］

マニシア編

60分のダンスWS解説②［ダンスとであう/マニシア］



（1）大切にしているポイント
◎Body（身体）とMind（心）とSpirit（精神）を感じてもらうこと。
◎自分の役割は指揮者。誘導はするが、決めつけはしない。
　3分の2は参加者の自発的な作業に任せる。
◎参加者にとっても、自分にとっても気持ちが高まる空間づくりをする。
◎参加者の「すごいな！」というところを見つける“眼”を持つ。
◎自分が幸せな気持ちになること。自分も楽しむこと。
　それが参加者へと循環していくこと。

（2）絶対にしてはいけないと肝に銘じていること
◎参加者にケガをさせないこと。そのための空間づくりをする。

（3）（あえて）過去の失敗談をひとつ
◎障がいのある人たちと舞台を作った際、事前情報不足で困った経験がある。先入観を持たずに対峙することを心がけているが下準備は重要。

地域に向けたダンスプログラムを作ってみたい方へのクラス
地域の担い手育成クラス～ダンス編
「ダンスを届ける！」

ダンスを届けるさまざまな手法と可能性に触れ、最初の動機が具体的な未来像へと変わる。

2日間でタイプの異なる二者のワークショップを体験した参加者たち。「探求の時間③」では、その違いや受け取ったもの、疑問に思ったことなどを付箋にアウトプットする時間を設けたのち、参加者一人ずつに発表してもらった。印象的だったのは、参加者がそれぞれの日常の活動に引き寄せた発見を語っていた点。自分に欠けていた視点や、共通していた安全面への配慮、場づくりの大切さ、効果的な音楽への関心、自分の持っているモノを自由に表現する難しさなど、他者の発見を聞きながら互いに頷きあう様子も見られた。また「アシスタントはどうしているか？」「選曲のポイントは？」など、具体的な質問にはその都度アーティストが答えた。

昼食後のレクチャータイムでは、さらなるコンテンポラリーダンスWSの多様性と可能性を感じてもらうため、アーティストとコーディネーターからの事例報告を行った。

今回の講座を通して、参加者たちは何を感じ、何を受け取ったのか。ここでセカンドメモを書いてもらった。さらに、初日のファーストメモで発表した最初の動機に対して、今何を考えているのか、変化したことはあるか、今後ダンスをどのように届けたいのか、などについて、参加者全員に発表してもらった。

探求の時間③二者のWSから見えてくる事とは？

※2つのWSを体験して、感じたことやイメージしたこと、問いや受け取ったモノなどを付箋メモにアウトプットする。(付箋メモと発表から抜粋)

◎ゲーム性のあるWSは、ダンスに興味がない人や経験のない人に向いている。
◎身体を動かす喜びを感じた。
◎昔の記憶がよみがえり、童心にかえることができた。
◎自分の内面を深く知ることができた。
◎達成感があるのがいい。
◎安全一身体と気持ちづくりは必要。
◎「いつの間にか」ーダンスを楽しんでいる。作品ができてしまっている。
◎心から踊れるようにワークが進んでいった。
◎身体の重さに気付かされた。
◎WSは一期一会。集えたことに感謝できる雰囲気が重要だと思った。
◎共通点は、応用すれば年齢問わず行える点。ダンスの幅広さを感じた。
◎身体よりも心が満たされた。
◎今までの自分とは違う自分に、自分で驚いた。
◎どちらもHappyだった。
◎ダンス初心者でも「みんなと踊ることができた、やれた」と思えた。
◎誰にでも失敗があるということがわかった。
◎自分の考えを届けて良い、ということを知った。
◎音楽をかけるタイミングで雰囲気が変わった。
◎初めて出会った同士が、動きを通して相手を知る、自分を伝える。いつしかどちらが主客かわからない境地へ。人間本来のコミュニケーションの根本に触れることができたと思った。

探究の時間のねらい

何かを学びに来ると、どうしても方法論だけを学んで、カタチだけをまねてしまいがち。しかし能動的に探求し、自分の内側からアウトプットしたことは心に深く残る。今回の体験を持ち帰り、カタチから入るのではなく、それぞれの多様性を活かしたWSづくりに役立ててもらいたいと考えた。

レクチャー［アーティストやコーディネーターからの報告］

☞マニシアさんは、NYでの活動からはじまった妊婦のダンスやママダンス、パパダンスなどを紹介。3人の子どもに恵まれる中で出会った臨月期のダンスプロジェクトでは、「人間であること」という原点の学びが始まったと語る。車椅子のダンサーとデュエットで踊る作品づくりや、JCDNの企画「踊りに行くぜ！！」「習いに行くぜ！東北へ！！」への参加、ダンスムーブメントセラピストとして携わっている緩和ケアや難病の子どもたちとのプロジェクト、障がいのある人とプロのダンサーがコラボする「ワレワレワークス」の活動など、さまざまなチャレンジが報告された。

☞神前沙織さんからは、現場を創るもう一つの要素である「コーディネーターの役割」についてレクチャー。所属するNPO法人JCDNのミッション「ダンスの持っている力を、社会の中で活かしていくこと」「子どもから高齢者まで、日常生活の中でダンスに触れる機会を創ること。そのための環境を創ること」に基づいたいくつかの事例を紹介するとともに、コーディネーターの仕事や役割、その必要性などをわかりやすく解説した。

☞セレノグラフィカさんは、長野県上田市の劇場（サントミューゼ）のレジデントカンパニー事業で取り組んだ、市民参加型ダンスの様子を映像を交えて紹介。京都市の若者サポートステーションと東山青少年活動センターと協働して継続する「じぶんみがきダンス」では、就労支援を要する若者たちと積み重ねるプログラムへの想いが語られた。また、プログラムを組み立てる上で、①対象者によってあらかじめ「これはできるだろう、これはできないだろう」という区別をしないこと②身体の持つ普遍性にまずはアプローチし、その上で何が起こるかを見届けること　③忍耐とは異なる「待つ」ことの尊さなどのポイントが語られた。

☞北九州芸術劇場からは小中学校を対象としたアウトリーチ事業や、「地域のアートレパートリー創造事業」から企業やサッカークラブ等とのダンスの取り組みのほか、障害のあるなしに関わらずダンスを楽しむダンスプロジェクト「レインボードロップス」などの活動を紹介。ダンスの持つ力や可能性について語った。

成果とフィードバック

2日間で得たものが、明日からの一歩につながることを願って。

◎二者の講師のデモンストレーションWSを体験し、レクチャーではさまざまな「ダンスを届ける」事例を聞き、WSづくりの手法や考え方は多種多様にあることを実感してもらった。

◎WSを体験した後、すぐに付箋メモに感じたことや聞いてみたい質問などをアウトプットしておくことで、体験を自分に引き寄せ深めることができた。

◎ファーストメモで「ダンスを届ける」ことを意識し、自己紹介タイムでは参加の動機や「なぜダンスで社会とつながりたいと思うのか？」を語ってもらった。WSを体験した後だったので、それぞれのダンスへの想いや抱える課題などが徐々に開かれていった。

◎WS体験＋能動的な思考＋言葉にしてアウトプットする時間を随時設けたことで、参加者の中に「何か」が深まりゆく様子が見られた。最後には、ファーストメモとセカンドメモの挟間で、どのようなことに気付いたのかを発表。中にはダンスで表現した人もあった。

◎参加者からは、今後取り組んでいきたい具体的なことや、それを実現するための具体的な質問が多く寄せられた。それに対し講師陣からは「何かを持って帰ってアクションを起こしてもらおう、実現してもらおう」という熱から生じる、温かいエールと具体的なアドバイスが贈られた。

【講師コメント】

▶このあとのステップとして、サードメモ、フォースメモと、探求し深めていってほしい。今日発表したことをぜひ実現していただき、その結果を期待しています（神前沙織さん）

▶社会は一つ一つの身体の集合体。その一つ一つの身体が変化すれば、社会も変化すると思っている。2日間で学んだことは、身体が変化することでたどり着くほんの一例。そこには無限の道があり、それを実現する可能性が皆さんの中にあると感じました（隅地茉歩さん）

▶ダンスを届ける向こう側には、届けてもらうのを待っている人が必ず居る。芸術と出合うことで救われる人も居る。そのことを信じて、目の前のことを精一杯やっていくこと。それを積み重ねることで、強さにつながったり、活動の芯になったりすると思います（阿比留修一さん）

▶今日この日が、明日を変えていく瞬間だと感じました。ピカソが「芸術とは、真実を理解するための偽り」と語った言葉があります。皆さんの活動は、真実を理解する道につながっている。自信をもって進んでほしいと思いました（マニシアさん）

劇場について知りたい・考えたい方向けのクラス

劇場基礎クラス「これからの公共劇場を考える
まち×ひと×舞台芸術＝??」

▮日　程：12／18（水）
▮会　場：北九州芸術劇場 創造工房 稽古場
▮参加者：13名

劇場・音楽堂に関わる運営・制作の人材交流と舞台芸術の振興に貢献する人材の育成と交流を目的とする「劇場基礎クラス」では、「これからの公共劇場を考えるまち×ひと×舞台芸術＝??」をテーマに掲げた。時代の変化とともに、文化芸術の果たすの役割が問われる中、私たちは「まちやひと」「地域の未来」とどのように向き合っていけばよいのだろうか。特に東京オリンピックが終了した2021年以降を意識しながら、ともに考える時間を持った。まずはじめに、近年、劇場・音楽堂を取り巻く環境がどのような流れにあるのかを簡単に説明。その後、北九州芸術劇場やゲストによる事例紹介を経て、2人組でのペアディスカッションを行ってもらった。参加者には随時その場で感じたことやキーワードを付箋にメモしながら事例報告を聞いてもらうことで、後半のディスカッションの鮮度が保てるよう工夫を凝らした。

【劇場・音楽堂を取り巻く流れ/概略】

この20年、劇場・音楽堂は単なる鑑賞の場としての役割だけでなく、劇場に足を運びにくい人たちのもとに芸術を届けようとするアウトリーチ活動を積極的に行うようになった。また、2010年以降は文化芸術のもつ社会包摂的な機能が注目され、2012年には「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律（劇場法）」において、国の施策として劇場や音楽堂の果たす役割が明文化された。さらに2017年には「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律」が施行され、法律名も新たに「文化芸術基本法」となった。これにより、文化芸術はその固有の価値を尊重しつつ、観光やまちづくり、国際交流、福祉、教育、産業、その他各関連分野における有機的な連携が可能になるよう配慮されることが求められるようになった。

profile

有門正太郎
（俳優、演出家、劇作家、有門正太郎プレゼンツ主宰）

北九州市門司区出身。倉本聰主宰「富良野塾」、泊篤志代表「飛ぶ劇場」を経て2005年「有門正太郎プレゼンツ」を始動。近年では全国の小中学校等でも演劇ワークショップを実施している。（一財）地域創造リージョナルシアター登録派遣アーティスト。

岩崎正裕（劇作家、演出家、劇団太陽族主宰、伊丹アイホール・シアター・ディレクター）

関西小劇場演劇界の旗手のひとり。1997年「ここからは遠い国」で第4回OMS戯曲賞大賞を受賞。劇作や演出のワークショップの指導者としても活躍し、全国の公共ホールで市民参加劇も発表している。

藤岡保
（北九州市身体障害者福祉協会アートセンター・センター長）

北九州で、障害者アートの活動支援、社会への普及啓発活動を目的として、アートセンターを立ち上げ活動中。市内のカフェや喫茶店での障害者アートの作品展開催や、商店街や商業施設でのステージパフォーマンスの場などを地域の方々と連携して企画実施している。

schedule

12/18（水）14:00〜17:00

- input　14:00〜14:05　オリエンテーション
- input　14:05〜14:30　事例①劇場（ダンス）×北九州市身体障害者福祉協会アートセンター「レインボードロップス」
- input　14:30〜14:55　事例②劇場（演劇）×若者応援センターYELL「芸術体験プログラム」
- input　15:00〜16:00　事例③「まち×ひと×舞台芸術のいま・これから〜クリエイション（創造）の視点から」
- output　16:05〜17:00　ペアディスカッション＆発表

ダンス×多様性

▮パートナー：（公財）北九州市身体障害者福祉協会アートセンター
▮ダンスプロジェクト「レインボードロップス」
▮アーティスト：セレノグラフィカ　▮アシスタント：今村貴子
▮目的：障害のあるなしに関わらずダンスを楽しむ場をつくり、多様な個性の魅力を創出する。
▮2013年〜（継続中）

◎北九州市身体障害者福祉協会は、2008年から「北九州市障害者芸術祭」を開催。2014年には、障害者アートの素晴らしさや可能性を社会に発信するため「アートセンター」を立ち上げた。現在は、絵画や音楽、ダンスなどさまざまな障害者アートの作品展やライブなどを市内各所で行っている。
◎主な活動は、ダンスWSや、戸畑駅前やリバーウォーク北九州でのフラッシュモブ、障害者芸術祭でのステージ発表など。2016年には小劇場での単独公演、2020年2月には単独公演・2ステージに挑戦。
◎立ち上げ時、まずはコンテンポラリーダンスを知ってもらうため、セレノグラフィカさんのWSを障害者芸術祭の実行委員の方々に体験してもらった（インリーチ）。
◎協働では、それぞれの専門分野を尊重かつ融合して、気づきを共有しながら新しいものを創ろうとするスタンスが成功している。また、こちらの常識をお互いに押しつけないことも大切にしている。
◎なぜダンスなのか？一言葉のない表現であり、身体的かつ性格的特徴がストレートに出てくること。また障害や肩書きではなく、生身の個人として出会えるダンスの力が、この事業に適していたと思われる。
◎事業を継続する中で、障害のある人もない人も「自分は自分のままでいいんだ」と自己を認め、一ダンサーとして自立していく姿が印象的だった。自己を受け容れ他者を受容できる、互いの関係性が対等で深く、温かい現場になっている。

演劇×若者

▮パートナー：北九州市子ども・若者応援センター「YELL（エール/以下YELL）」
▮プロジェクト「若者応援芸術プログラム」
▮アーティスト（2017年〜）：有門正太郎、守田慎之介　▮アシスタント：門司智美
▮目的：就労支援を必要とする若者を対象に、コミュニケーション力や自己肯定感を高める手助けを行う。
▮2013年〜（継続中/2016年のみ休止）

◎YELLは、社会生活を営む上でさまざまな悩みや困難を抱えている子どもや若者を対象に、ワンストップサービスで支援していくことを目的に開設された「総合相談窓口」。「農業体験」や手作り豆腐の販売を行う「仕事体験」などを通して、就職や復学などへの一歩をサポートしている。そうした活動の一つである「芸術体験」の分野で2013年から協働。田上豊さんの演劇WSや、セレノグラフィカさんのダンスWSなどを行ってきた。2016年の一時休止期間を経て、2017年からは地元のアーティスト・有門正太郎さん、守田慎之介さんらと演劇WSを再開。まずは職員の方向けに、WSのねらいや意義を丁寧に説明しながら体験してもらう「インリーチ」を行った。
◎繊細で感性豊かな若者たちをよりよく知る必要性を感じ、2018年にはWS以外に数回のリサーチを行った。YELLの若者たちの普段の活動にアーティストが寄りそうことで、改めて見えてくる若者たちの素顔や個性に触れることができた。
◎協働する上では、当日直前・直後に必ず協働先の担当者と打ち合わせやフィードバックを行い、参加者の状態を共有することを心がけた。
◎2019年は、演劇公演の観劇＋バックステージツアーを全2回、演劇WSを全9回行い、オリジナルの紙芝居を製作し発表まで行った。一緒に作品づくりをする、という継続的な関係性の中で、若者たちにも責任感や自覚が芽生えていくのを感じた。

劇場について知りたい・考えたい方向けの「劇場基礎クラス」

「まち×ひと×舞台芸術のいま・これから」ゲスト事例③

クリエイション（創造）の視点から～地域との作品創造事例～

カスガイ創造プロジェクト「演劇×自分史」

▮（公財）かすがい市民文化財団（愛知県春日井市）
▮アーティスト：有門正太郎

◎名古屋市の北東に隣接する春日井市と2016年から継続している「カスガイ創造プロジェクト」は、「演劇をつかって自分史で遊ぶ！」をキーワードに、市民とともに「自分史」の魅力を再発見するプロジェクト。会場となる「文化フォーラム春日井」は、市役所および市民会館と隣接しており、視聴覚ホールのほか、ギャラリーや図書館も併設している。
◎2016年、「演劇を通して、地域の人々と心を通わせたい」と考えた同財団が、（一財）地域創造のリージョナルシアター事業に応募。登録派遣アーティストとして伺った。当初は目的が定まらず、手探りでさまざまな演劇WSを実施。そのリサーチの中で、書の街・春日井市ならではの「日本自分史センター」の存在が浮かび上がった。ここでは、日本中から自分史の寄贈本を受け付け、保存・閲覧できる事業を行っている。また、毎年一回「掌編自分史作品」を全国公募する事業も行っているが、今後の展開に課題を抱えていた。その状況に着目し、2017年度から「演劇×自分史」への取り組みが始まった。
◎「自分史」というと高齢者のイメージが強いが、幅広い多世代を対象にしたかったので、年間通して行うWSは中学生以上を対象に公募。その一方で小学校へのアウトリーチ活動を行うなど、演劇×自分史の土台づくりから取り組んだ。
◎第一弾は、全8回のWS＋発表会「この場所、自分史」。街の魅力や歴史を再発掘するリサーチや参加者自身の体験エピソードから想像を広げて作品を創り、2018年3月に発表会を行った。
◎2018年度は高校の演劇部でのWSなどを展開。さらに日本自分史センターの「掌編自分史作品募集」のテーマ（2018年は「旅に遊び　旅に学ぶ」）ともリンクして、旅にまつわる作品づくりをスタートした。参加者は前年度の2倍の19名、WSも全17回とし、チラシのビジュアルも写真家・浅田政志さんとともに創るなどバージョンアップした。2019年2月に演劇×自分史第2弾公演「旅旅（ふたたび）」を2公演開催。
◎第3弾は、掌編自分史作品募集のテーマ「恋したわたし」にちなんだ作品づくりが進んでおり、裏方や応援団なども募集。中学・高校生も増え、24名が参加している。

アイホールや全国での取り組み

▮伊丹市立演劇ホール AI・HALL（兵庫県伊丹市）ほか
▮アーティスト：岩崎正裕

◎1988年に開館したAI・HALL（アイホール/伊丹市立演劇ホール）は演劇専門のホール。ホールの稼働率は高く、公演事業のほか、各種講座やWS、アウトリーチ事業などを行っている。
◎アウトリーチを行う上では、参加者との間に上下関係がない。互いに対等であり、「共生」という視点で作られる良質なWSプログラムを目指すことが、アーティストの責任だと感じている。
◎アウトリーチに出かけることで、アーティストは自らの創造性にも大きな影響を受ける。一方で劇場や音楽堂は、アウトリーチを糧に劇場内でよりよい作品を創ることも忘れてはならない。相互が相乗効果を果たしてよりよい循環を生むことが、理想的なアウトリーチ事業の展開だと思う。
◎より豊かな共同体を作るために、今、アートの力が必要とされている。職場と家の往復だけの現代社会では、ひと昔前の祭りや広場のような「第三の場所」が必要。アウトリーチや地域と創るクリエイションの場は、この「第三の場所」に匹敵すると思う。

【紹介された事例】

伊丹
■**演劇WSプログラム「机の上の擬人化」**
◎劇場として派遣型WSの検討と検証を重ねるために立ち上げた「アウトリーチにおけるワークショップ研究会」で開発したプログラムの一つ。どのアーティストが派遣されても同じ内容が行われることから市内の学校で好評を得ている。
■**アイホールがつくる「伊丹の物語」プロジェクト**
◎ごまのはえさん（劇作家・演出家・俳優）のアイデアから生まれた「地域とつくる舞台」シリーズ。各家庭に眠っていた古い写真を掘り起こすことから始まり、3年かけて伊丹の歴史と記憶を紐解き、演劇作品を創作した。
■**いたみ・まちなか劇場「味わう舞台」**

その他全国
■**アーティスト・イン・レジデンス/創作公演「Sumako-或新劇女優探索記-」**
◎長野県・上田市交流文化芸術センター（サントミューゼ）の企画。信州出身の女優・松井須磨子を題材に選び、まちあるきや松井須磨子を研究する団体との交流などを重ね、地域に残る作品を創った。
■**北海道・深川市文化交流ホール主催事業「異色のコラボ　みらいSHOW学校」**
■**NPO法人こころネットKANSAIコラボ作品「ちいさな祈り」**ほか

発表とフィードバック まち×ひと×舞台芸術がコラボすることで見えてくる未来とは？

【ペアディスカッションからの発表】

◎地域に根差した芸術活動やクリエイションをすることで、参加者に市民としての当事者意識がわいたり、まちに愛着がわいたりする利点を感じた。
◎事例報告を聞く中で、アウトリーチなどのWSを受講した人の新たな才能が開花することもあるのでは、と思った。
◎さまざまな事例を聞いて視野が広まった。また、お互いの携わっている劇場や音楽堂の事例もシェアできたのがよかった。今後、アウトリーチを推進していきたいと考える中、「インリーチ」という手法があることを初めて知った。
◎講座を聞く中で、たとえば職場のメンタルヘルス的な観点からアウトリーチを取り入れられる可能性も感じた。
◎さまざまな課題を抱える人々が本来持っている力を芸術の力で引き出せるということが、とても素敵なことだと感じた。

【フィードバック】

◎芸術を通して、まちや劇場の未来を考えようとする講座に、多くの方が興味を持ってくださったのが嬉しかった。ここで出会い、ともに考えた縁をつないで、それぞれの活動の場で何かが変わる新しいスタート地点になれば、と思った。
◎今回、さまざまな事例を紹介し、それに対する参加者の声を聞く中で、劇場や音楽堂がただ芸術を届けるだけでなく、それを地域にどう活かしていくかが問われていく時代になることを改めて実感した。今後ますます社会が多様化していく中で、劇場や音楽堂には何ができるのか。一歩ずつ事業を進めながら、繰り返し考えていくことが大切だと感じた。

舞台芸術を広く楽しみたい方を対象にした講座

オープンレクチャー　舞台の仕事シリーズVol.1

「翻訳家の仕事」

▮日　程：11／30（土）
▮会　場：北九州芸術劇場 創造工房 稽古場
▮参加者：33名

今年度のオープンレクチャーは“舞台の仕事シリーズ”と題し、舞台芸術に関わるさまざまな仕事や創り手の想いなどを紹介する新シリーズをスタート。その第一弾として、数多くのフランス戯曲を翻訳する岩切正一郎さんを講師にお迎えした。

もともとフランスの近・現代詩、おもに詩人ボードレールに関する研究家であった岩切さん。大学時代の友人であり現代音楽作曲家の笠松泰洋さんの紹介で演出家の蜷川幸雄さんと出会い、フランス戯曲の翻訳を本格的に手掛けるようになった。

戯曲翻訳と通常の翻訳の違いは（図1）の通り。演劇の場合、演出家とのすり合わせ後、稽古にも立ち会い必要に応じてセリフを直していく。「戯曲の翻訳は協働作業なんですね。とにかくみんなでいい作品を創ろうとする。それが演劇のいいところですね」と岩切さん。手掛けた作品の中から準備稿と決定稿を参加者に声に出して読み比べてもらったり、上演台本に実際の稽古での気付きや演出・俳優陣からのコメントを書き加えた写真などを見せながら、翻訳ができあがっていくプロセスを具体的に紹介した。

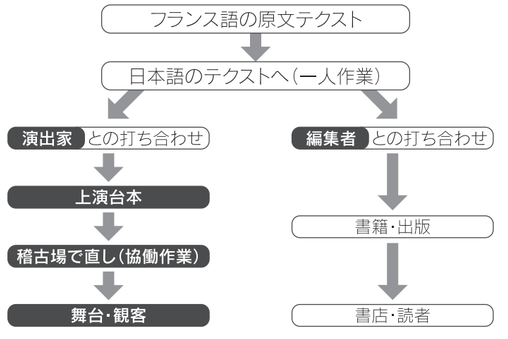
また、さまざまな時代の演劇や小説などを通して現れるフランス文学を貫く普遍的なテーマについても解説。人間は常に理想と現実など相反する二つに引き裂かれている存在であり、フランス演劇では普遍的に人間が悩む二重性を舞台の上で見せながら、「人間として生きるとはどういうことなのか？」を観客に問いかける作品特性も語られた。

翻訳の際には、フランス語の原文を声に出して読んだ時の空気量を大切にしており、同じ空気量で読める日本語になるよう工夫しているとのこと。「詩と演劇は、声に出して言葉を表現するという点で似ているが、演劇は動きながら言葉を発するのが特徴。台本の文字が紙の上から消えて、その人の身体の内から出てくる言葉にならないと演劇のセリフにはならない」というひと言が印象に残った。

岩切正一郎さんの翻訳上演作品

2001年	ラミュ/ストラビンスキー『兵士の物語』
2007年	アヌイ『ひばり』　カミュ『カリギュラ』
2011年	ベケット『ゴドーを待ちながら』
2013年	ヴィアン『帝国の建設者』
2014年	サルトル『アルトナの幽閉者』
2015年	ラヒミ『悲しみを聴く石』
2017年	ラシーヌ『フェードル』　シュミット『謎の変奏曲』 ジロドゥ『トロイ戦争は起こらない』　アルカン『この熱き私の激情』
2018年	アヌイ『アンチゴーヌ』　カミュ『誤解』
2019年	ベルイマン『リハーサルのあとで』　ノレン『終夜』 カミュ『カリギュラ』　レザ『正しいオトナたち』

（図1）翻訳の流れ（舞台と書籍の違い）



profile

岩切正一郎（国際基督教大学（ICU）教授、戯曲翻訳家）

手がけた作品に、ラミュ/ストラヴィンスキー『兵士の物語』（演出・山田和也）、アヌイ『ひばり』、カミュ『カリギュラ』（共に演出・蜷川幸雄）、サルトル『アルトナの幽閉者』（演出・上村聡史）、シュミット『謎の変奏曲』（演出・森新太郎）、ラシーヌ『フェードル』、アヌイ『アンチゴーヌ』（共に演出・栗山民也）他。第15回湯浅芳子賞受賞。

舞台技術やライヴビューイング等に興味のある方向けのクラス

舞台技術セミナー

札幌文化芸術劇場 hitaru×兵庫県立芸術文化センター×北九州芸術劇場　3館共同企画

「ITネットワークで劇場をつないでみた!何ができる?!」

繋がり、響き、感じあう

■日　程:12／12(木)　■会　場:北九州芸術劇場　大ホール　■参加者:59名

【後援】公共劇場舞台技術者連絡会　【協力】ヒビノ株式会社

札幌、兵庫、北九州という1500km離れた3劇場間をITネットワークでつなぎ、「何ができるのか？」を追求した舞台技術セミナー。今回は、①インターネットを使ったライブ配信の双方向性を探ること②その技術を劇場空間の中で活かせないか③3つの会場のアーティストと観客が一体となる新たな舞台芸術を楽しめないか、という3点から広がる可能性を探った。

今回、3拠点をつなぐネットワークシステムは、一般家庭でも使われている低コストのNTTフレッツ光回線。さらに冒頭の技術解説では、音声と映像が一方通行でライブ配信されるだけではなく、臨場感やイマーシブ(没入感)のある「ライブストリーミング」の技術が確立されることで、今後、地方の公共ホール同士がつながって、双方向性のある新しいコンテンツが生まれる可能性などが投げかけられた。

基調講演(概略)

「ITネットワークで劇場をつないでみた!何ができる?!～音場をつなぐと何が起きる？～」

尾本章

◎物理的な観点からのレクチャー。音場の物理的な特徴を厳密に再現することを目指す「物理的な音場再生」と、創り手やエンジニアの芸術的な感性に基づく「芸術的な音場創成」の違いなどを解説。双方が補完しあうところで見えてくる可能性を探る研究を重ねている。

◎80chのフラーレンマイク＋音響樽(96ch)・音積木(48ch)を使った物理的な音場共有の試みや、24chの鋭指向性マイクと同数のスピーカーを用いた実験などの取り組み事例を紹介。さらなる性能向上を目指して、物理的＋芸術的＝多目的音場再生システムを研究している。

◎このようなシステムと通信が結びつくことで何ができるのか。たとえば、高次Ambisonics(アンビソニックス)を使った作品制作をする人も増えている。今後さらに技術研究が進み、芸術的な美しさと工学的な技術が融合することで、社会的にどのようなフィールドが広がっていくのかが楽しみである。

profile

尾本 章
九州大学 芸術工学研究院 教授

1987年九州芸術工科大学芸術工学部音響設計学科卒業。日東紡音響エンジニアリング勤務を経て、1991年より九州芸術工科大学助手、1997年准教授。2014年11月より現職。音場の計測・評価・制御を中心として音場再生、伝送などの研究に取り組む。博士(工学)。

「劇場鑑賞サポートの社会的動向と展望」

長津結一郎

◎専門であるアーツマネジメントの観点からのレクチャー。劇場法では、「劇場・音楽堂は、社会参加の機会を開く社会包摂の機能を有する基盤」と明記されている。社会包摂は1980年代にフランスで始まった考え方。しかし、「包摂」と「排除」は表裏一体。本来はその狭間にある境界線がなくなり、一人一人の多様性を包摂する社会を目指すことが大切。

◎社会包摂に関わる芸術活動にとって、鑑賞環境をつくることはもうひとつの「表現」である。そこでは、特定の誰かのために行うことが、実はあらゆる人のためになるという視点が必要。

◎ITネットワークの可能性としては、①劇場に関心を寄せる契機を創出する②遠隔から劇場に関わる機会を創出する③劇場内アクセシビリティを向上させる可能性がある。大切なのは境界線の向こう側にいる「誰か(個人、団体)」とともに協働しながら「何ができる？」と模索し、手を動かすことだと思っている。

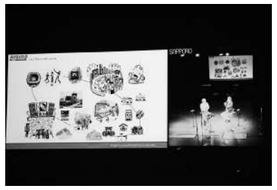
profile

長津結一郎
九州大学 芸術工学研究院 助教

障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動やそれを支える環境づくりに着目した研究と実践を行う。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』(九州大学出版会、2018年)。博士(学術・東京藝術大学)。

schedule

12/12(木) 14:00～18:30

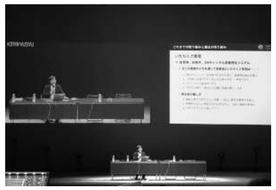


14:00～14:15

オープニング同期セッション
兵庫(ジャズバンド部)×北九州(ダンス部)

14:15～15:00

技術的解説
「3拠点をつなぐネットワークシステムについて」
ヒビノ株式会社 ヒビノプロオーディオセールスDiv.　阿部春雄
古河ネットワークソリューション株式会社 ビジネス推進部　山谷有史



「ライブストリーミングの未来
～ネットワーク技術の進歩が地方劇場を変える～」
ヒビノ株式会社 ヒビノプロオーディオセールスDiv.
公共企業システム事業推進部ホール開発チーム・マネージャー　庄健治

15:00～16:00

基調講演
「ITネットワークで劇場をつないでみた!何ができる?!
～音場をつなぐと何が起きる？～」
九州大学 芸術工学研究院 教授　尾本章

「劇場鑑賞サポートの社会的動向と展望」
九州大学 芸術工学研究院 助教　長津結一郎

16:00～16:40

3会場合同パネルディスカッション

17:00～18:00

LIVE配信実験(1.兵庫 2.北九州 3.札幌)

18:00～18:30

3校による同期セッション

3会場合同パネルディスカッション～繋がりあうこれからの劇場～

◎札幌、兵庫、北九州の3会場にいるパネラー8名を結び、パネルディスカッションを開催した。

◎今回のシステムでは、空間ごと共有できる双方向性のある「ライブストリーミング」の実現を目指した。一会場の音源やパフォーマンスを、その空気感ごと切り取って別の会場に持っていくことは可能なのか。この後のLIVE配信実験で、劇場間で共有できるコンテンツの幅などが大きく変わるのでは、と期待している。

◎各会場には、客席の周囲に6本、上から4本、計10本のマイクと一対一のスピーカー10本が置かれている。音声では32ch×3会場で96ch、映像は4chを使用。客席の拍手や歓声などが、他会場のアーティストに届く仕組みになっている。さらに3会場のステージ照明も同期させているため、他会場で行われているパフォーマンスを映像で観ながらも、舞台上の照明はリンクした一体感のあるステージを観ることができる。

◎鑑賞環境として課題の一つであるユーティリティールーム(親子室)にも特別な音響システムを施し、ホールの客席との差異などを検証したいと考えた。

【参加パネリスト】

◆兵庫県立芸術文化センター／舞台技術部副部長 …… 金子 彰宏
◆札幌文化芸術劇場／舞台技術部長 …… 伊藤 久幸
◆北九州芸術劇場／テクニカルディレクター …… 中村 国寿
◆九州大学／芸術工学研究院教授 …… 尾本 章
◆九州大学／芸術工学研究院助教 …… 長津 結一郎
◆ヒビノ株式会社／ネットワーク事業準備プロジェクト …… 宮本 宰
◆ヒビノ株式会社／ヒビノプロオーディオセールスDiv. …… 庄 健治
◆ヒビノ株式会社／ヒビノプロオーディオセールスDiv. …… 阿部 春雄

LIVE配信実験～3校による同期セッション～

performance

◎兵庫会場から送られてきたジャズバンド部の演奏。ステージの照明が同期されているため、北九州会場でもソロ奏者の立ち位置に同じスポットが当たる。臨場感あふれる音場との相乗効果もあって、奏者がそこに立っているような印象を受けた。

◎札幌会場から送られてきた吹奏楽部のダンプレ(ダンス＆プレイ)演奏。北九州会場では、客席を奏者たちが練り歩きながら演奏しているように聞こえた。会場全体が音場にすっぽり包みこまれる没入感があった。

◎北九州会場には、札幌で出演している高校生の中にお孫さんがいるというお客さまがサプライズ登場。ライブストリーミングならではの双方向コミュニケーションの場も見られた。

◎距離を感じさせないパフォーマンスは、劇場コンテンツの未来の可能性に触れたような3校同期セッションだった。

北九州市立高等学校ダンス部 N9SD CREW(ノースナインスティツダンスクルー)
1999年に同好会としてスタート。2年後の2001年には部活動に昇格し、現在までさまざまな大会やイベント等で全国区の実績を残している。活動21年目。高校部活動としては珍しく、ストリートダンスを主体として取り組んでいる。

兵庫県立高砂高等学校ジャズバンド部 Big Friendly Jazz Orchestra
北海道札幌国際情報高等学校吹奏楽部 SIT Band

実施後記　最新の技術やテクノロジーで「何ができるのか？なにをやるのか？」を大事にし、ネットワーク技術による新たなコンテンツを模索し没入感や臨場感を得ることで離れた場所であっても感動や興奮の共有を可能にできないだろうか、と本セミナーを実施いたしました。これを機に、各地域や施設間での連携や交流につながることを期待し、当劇場もさらなる向上を目指します。

これまでの「劇場塾」の流れ　2012年度〜2018年度の取り組みの概要 ※講師の所属・肩書きは、初登壇時のみ、当時のものを表記しています。

2012年度

1 地域のアーツマネージャー養成講座

津村卓（北九州芸術劇場館長・チーフプロデューサー）
宮城聰（SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督）
吉本光宏（ニッセイ基礎研究所主席研究員・芸術文化プロジェクト室長）
大谷燠（特定非営利法人DANCE BOX 代表）

2 舞台技術講座　音響編

浪花克治（森本浪花音響計画有限会社 取締役副社長）
小田切浩（ヤマハサウンドシステム株式会社 品質管理部 検査課課長）
石丸耕一（東京芸術劇場 管理課施設担当）

2013年度

1 地域文化コーディネートクラス

津村卓
大月ヒロ子（有限会社イデア代表取締役・ミュージアムエデュケーションプランナー）
大谷燠、セレノグラフィカ〈隅地茉歩+阿比留修一〉

2 劇場制作クラス

津村卓
内藤裕敬（南河内万歳一座 座長、劇作家・演出家）

3 オープンクラス　基礎講座

「劇場を取り巻く環境の変化」
草加叔也（空間創造研究所 代表）
「地域とあゆむ舞台芸術の取り組み」
中村透（作曲家・シュガーホール芸術監督）

4 舞台技術クラス「舞台技術講座　照明編」

藤巻聰（株式会社FENS代表取締役）
齋藤稔（丸茂電機株式会社技術部技術課主任）
宇佐美浩一（株式会社マイルランテック代表取締役）
濱照男（（公財）新国立劇場運営財団 技術部照明課長）

2014年度

1 地域文化コーディネートクラス

コーディネーター　大月ヒロ子
内藤裕敬
市橋芳則（北名古屋市歴史民俗資料館 学芸員）
セレノグラフィカ〈隅地茉歩+阿比留修一〉

2 劇場制作クラス

コーディネーター　津村卓
久野敦子（（公財）セゾン文化財団 プログラムディレクター）
佐藤隆弘（文化庁芸術文化課文化活動推進室）
岩崎正裕（劇団太陽族主宰、作家・演出家、伊丹AI・HALLディレクター）

3 オープンクラス　基礎講座

「サッカーからみる地域協働」
横手敏夫（株式会社ギラヴァンツ北九州 代表取締役社長）
「地域と向き合う劇場・ホールのこれから」
吉本光宏

4 舞台技術クラス「舞台技術講座　舞台機構編」

森健輔（森平舞台機構 代表取締役社長）
三精テクノロジーズ（株）
伊藤久幸（新国立劇場 技術部長）
草加叔也

2015年度

1 地域文化の担い手育成クラス

（A）地域文化コーディネーターコース　（B）ワークショッププログラム作成コース

有門正太郎（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ代表）、田上豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）、津村卓、岩崎正裕

2 劇場基礎クラス

「公立文化施設における舞台技術者の役割とは」
西村充（元いわき芸術文化交流館アリオス 施設管理課長 舞台技術マネージャー）

3 オープンレクチャー

vol.1「戦後から今に至る北九州演劇史を語る」 井生定巳（劇団青春座代表）
vol.2「なぜワークショップを教育現場で行うのか？」 苅宿俊文（青山学院大学 社会情報学部 教授）
vol.3「観る＆語る・劇場と演劇を2倍楽しむ！」 大堀久美子（編集者・ライター）

2016年度

1 地域文化コーディネートクラス

「ダンスをキーワードにコーディネートを考える」
栗林礼也（（一財）地域創造・ダンス担当ディレクター）
セレノグラフィカ〈隅地茉歩+阿比留修一〉
神前沙織（NPO法人Japan Contemporary Dance Network）

2 劇場基礎クラス

「劇場基礎講座〜演劇・舞台美術の体験から企画づくりまで」津村卓
小澤櫻作（上田市交流文化芸術センター 音楽プロデューサー）
岩崎正裕、池田ともゆき（舞台美術家）

3 オープンレクチャー

vol.1　「舞台芸術に関わる著作権と肖像権入門」福井健策（弁護士（日本・ニューヨーク州）／日本大学芸術学部　客員教授）
vol.2　「文化オリンピアードへの展望〜東京2020大会を地域の力とするために〜」吉本光宏
vol.3　「『演劇』を語ろう〜九州演劇の魅力をもっと味わうために〜」大堀久美子

2017年度

1 地域文化コーディネートクラス

「郷土芸能・祭りとつくる未来」
小岩秀太郎（（公社）全日本郷土芸能協会事務局次長／東京鹿踊代表）

2 劇場基礎クラス

「想いをカタチに！"つくる"にチャレンジ」
北九州芸術劇場職員、有門正太郎

3 オープンレクチャー

vol.1　「古典芸能入門〜現代から紐解く古典の魅力」木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎主宰）
vol.2　「老いと演劇〜OiBokkeShiの試み」菅原直樹（「老いと演劇」OiBokkeShi主宰）

2018年度

1 アーティストや舞台芸術に関わる方のためのクラス

「まちとつくる、アート・舞台芸術の可能性を探そう〜門司港編〜」
カミイケタクヤ（美術・舞台美術家）、守田慎之介（劇作家・演出家、「演劇関係いすと校舎」代表、北九州芸術劇場ローカルディレクター）

2 地域文化コーディネートクラス

「アートでつながる、ひと・もの・まち〜芸術文化がつくる、新たな"つながり"を探そう〜」
大月ヒロ子、多田淳之介（演出家、東京デスロック主宰、富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督）

3 オープンレクチャー

vol.1　「日本の現代演劇噺史（ばなし）〜演出家を中心に」坪池栄子（元びあ演劇記者、地域創造&Performing Arts Network Japan編集長）
vol.2　「舞台の名脇役〜小道具の世界」　高橋岳蔵（劇団☆新感線）

おわりに

「明日からのヒント!見つかりましたか?」

◆北九州芸術劇場では、「開かれた劇場」「出会いの劇場」「地域と向き合う劇場」「安全・安心な劇場」―この4つを運営理念とし、2003年の開館以来、地域の芸術文化の振興に力を注いで参りました。また、「創る（舞台芸術創造の発信）」「育つ（地域の人々とともに育つ）」「観る（暮らしを彩る多彩な舞台芸術）」「支える（市民の創造活動の支援）」の4つのコンセプトに基づき、さまざまな事業を展開しています。

◆劇場塾は、これからの地域文化の振興を担う人材の育成や、人的ネットワークの形成を目的にした人材育成プログラムです。今回のテーマは、「体験して、考えて、つながって、明日からのヒントを一緒に見つけませんか？」。地域に向けたダンスプログラムを作ってみたい方を対象にした「地域の担い手育成クラス〜ダンス編」と、これからの公共劇場や舞台芸術の可能性について考えてみたい方に向けた「劇場基礎クラス」、さらに舞台技術に興味がある方を対象とした「舞台技術セミナー」を企画。オープンレクチャーでは「舞台の仕事シリーズ」の第一弾として、翻訳家を招いたレクチャーを開催しました。

◆この場をお借りしまして、「劇場塾2019」に関わってくださった講師の皆さま、ご参加いただきました方々、並びに関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

令和2年3月
公益財団法人　北九州市芸術文化振興財団

【企画・製作】　北九州芸術劇場
【主催】（公財）北九州市芸術文化振興財団
【共催】北九州市
【助成】　文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

［取材・編集］　Brain Child　重岡 美千代
［デ ザ イ ン］　Connect to fun Noah　横山 晴康
［タイトルロゴ］　トミタユキコ（ecADHOC）
［印　　刷］　株式会社 ゼンリンプリンテックス